

中学・高等学校における「郷土芸能」の学習 —宮崎県内アンケート調査から—

宮崎女子短期大学 佐々木昌代
宮崎大学 高橋るみ子

1. はじめに（目的・方法）

平成9年度より高橋を中心に、宮崎県女子体育連盟会員の協力を得て、宮崎の子どもたちから宮崎らしい表現を引き出すことを企図した、宮崎の「郷土芸能」を題材とした表現・創作ダンス（「創作」と「伝承」を同時に体験する学習）の授業づくりに取り組んできた。その教材づくり、授業研究の手がかりとなる基礎資料を得るために、まず、県内の小学校を対象に、教育活動にどのように「郷土芸能」が取り入れられているか、あるいはどうして取り入れられないか等々、アンケートによる実態調査も行ない、その結果は紀要（「表現運動とフォークダンス（日本の民踊）の学習」宮崎大学教育学部紀要86 1999. 3）等で報告した。

本年度は、同様のアンケート調査を県内の中学・高等学校に対して実施し、小学校から高等学校まで見通して、「郷土芸能」の取り扱いの実態について検討することから、研究を深め、授業づくりを一層すすめる手掛かりを得ようとした。しかしながら、今回の調査結果からは、中学校と高等学校の取り扱いに、予想以上に違いが認められ、さらに、中学校の取り組みの実態が、すでに報告した小学校の実態に近いことが判明した。そこで、本報告では、中学校と高等学校の取り扱いの共通点と相違点を中心に考察をすすめた。

2. 結果について

アンケートの回収率及び郷土芸能の実践率は、ほぼ等しく、わずかに高等学校が高率であった。この3年間に取り上げられた郷土芸能も、学校数が多いことから数的には中学校が多いが、「盆踊り・音頭」「神楽」「太鼓踊り」「棒踊り」が多いといった傾向に差はみられない。

学習活動としての位置づけには違いが認められた。中学校は、全校生徒を対象とした体育大会、クラブ活動、創意の時間などでの取り組みが多く、高等学校は、保健体育科の単元での取り組みが多い。発表の場も、中学校では地域の祭礼や行事・イベントといった地域社会との交流、高等学校では県下の高等学校の合同大会といった学校相互の交流をより意識したものとなっていた。

学習内容は、中高ともに「踊り」の学習が大半を占め、高等学校からは、創作学習を試みているという回答があった。

指導についても、違いは顕著であった。中学校は、「地域の指導者や伝承者に直接指導を任せ

る」場合が半数以上であるのに対し、保健体育科の単元内での取り組みが多い高等学校では、「教員が指導する」場合が多い。ただし、外部の指導者に頼らずに教員が指導するには、「解説書の入手」や「PTAの協力」、さらには「生徒達自身に資料収集やVTR収録を任せる」といった工夫がなされていることも明らかとなった。

指導に関連して、取り上げていない理由をみると、中高ともに「時間がない」「指導できる教員がいない」をより多く選択している。違いとして感じられたことは、地域と関わる場での発表が多い中学校は芸能の地域性に拘っている、学区が広がる高等学校は特定地域に限らない、といった取り上げる芸能の地域に対する意識であった。

従って、取り組みの目的についても、中高ともに「郷土や自文化について再発見する」が最も多くなっているが、中学校がねらいとする「自文化」は地域の文化であり、高等学校がねらいとする「自文化」は日本の文化であることが推測される。中学校では、「再発見」と同数で「地域や日本の文化を伝承する」も最も多く選択され、高等学校に比べ「伝承」に対する意識がより強いとも思われた。これらの次に多いのは、中高ともに「地域にすぐれた郷土芸能があるから」であり、予想に反して、フォークダンス（日本の民踊を含む）のねらいのひとつである「踊りを楽しむ」は少ない。

郷土芸能に取り組んで気づいた良い点や成果については、郷土芸能の教材化を工夫して教員が指導する高等学校では、「地域の文化・芸能に気づく、再発見する」「興味・関心が高まった、理解が深まった」が多く、対して、地域の伝承者や指導者に指導を任せる中学校では、「地域社会との交流ができた」が多いという違いがあった。

一方、取り組んで気づいた課題としては、中高ともに「郷土芸能の指導者に関わる問題」をより多く指摘している。中学校は指導者の依頼に伴う問題、高等学校は教師自身の郷土芸能に対する知識不足や情報入手の難しさであった。

3. まとめ

郷土芸能の取り扱いの実態について比較考察したところ、中学校は地域交流から郷土芸能の学習に、高等学校は郷土芸能から郷土と日本文化の学習に向かうといった取り扱いの方向性に相違点がみられた。共通点は、当然ではあるが、郷土芸能を踊る体験から学習を成立させているところである。今後は、現在すすめている学校と保存会等の地域が連携して取り組んでいる現場の取材等々からも郷土芸能の学習の実態により迫るとともに、今回の調査結果から認められた取り扱いの課題が解消に向かうような発想や提案を、宮崎の郷土芸能を題材とした「創作」と「伝承」を同時に体験する学習の授業づくりから見出していきたい。